4/21/2010

＜日本・アジアのキリスト教＞（演習・Seminar）

＜ 2009 年度の演習＞　　cf.カント『実践理性批判』翻訳（1918）
「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）
「宗教学」（1922）
「プロティノスとカント――宗教哲学の二つの任務」（1925）
『宗教哲学序論』（1940）

＜波多野宗教哲学の文脈・背景＞
・「宗教哲学は宗教的体験の理論的回顧それの反省的自己理解」
・1920 ～ 1935/1940 までの展開
　1917 年：京都帝国大学教授（宗教学講座担当）。40 才。
　1922 年：宗教学第一講座担任、同第二講座兼任。
　1928 年：宗教学第二講座分担。
　1937 年：宗教学第二講座担任、同第一講座分担。定年退職。60 才。

＜宗教哲学の本質及其根本問題(1920)＞：波多野宗教哲学の原型・原構想
「生命活動の深き省察」「学的研究の鋭き反省」（生命と学問）
「第一、宗教の学的研究において宗教哲学の占むる位置」「第二、宗教哲学の諸の立場、特に批判哲学の立場」「第三、宗教の本質」「第四宗教哲学の諸問題」「本論とも言うべきは第三、第四」(173)、「講演の序論とも言われ、宗教哲学の方法論とも見られるべき第一、第二の部分」（174）（体系と方法）
「宗教が、ややもすれば人々の考えるように、無知なる者の不条理な迷信とか不合理な誤謬とかでなく、却って理性に根底を置くものであること、事実上これに反対する人があるにしても理想上は万人がこれを承認すべきものであるを明らかにしたいと思う」(173)、「このことたる固より哲学の立場、しかも特殊の哲学上の立場において初めて可能になる」（173）

「第一章　宗教の学的研究において宗教哲学の占むる位置」（175-192）
「第二章　宗教哲学の諸の立場　批判哲学の特質」（192-204）
「第三章　宗教の本質」（205-217）
「第四章　宗教哲学の諸問題　特に神の観念」（217-232）
「第五章　宗教哲学の諸問題　特に救済の観念」（232-242）

「宗教学と言えば、表面では宗教を学的、方法的に探究することを意味するが、裏面には特別な含意をもっているのである」、「嘗て世に行われた二種の学に反対して自己の名を掲げようとする」、「一定特殊の歴史的宗教の立場から宗教を研究する神学」、「世界及び人間の一般的考察より得たる普遍的原理をもって宗教を理解せんとする哲学、これら二者から区別される新しい学として、宗教学は成立した。宗教学は神学の偏狭と附会とを去り、

哲学の思弁と空想とを棄てて、公平に、著実に、経験的に、科学的に宗教を研究することを主張する」（175）
「中世期」（175）、「宗教と言えば己の信ずる特定の宗教を意味する。それ故に種々の宗教を包摂する一般概念としての宗教なる語は、彼らの意識に現れようもなかった」、「神学が彼らにおける宗教の唯一の学的研究であったのである」、「中世の末期から」「宗教という普遍的概念が次第に鮮やかに彼らの学問的意識に上って来た」、「一定の特殊宗教の立場を理論的前提とせず、世界及び人生の一般的研究に立脚して宗教を考察せんとする傾向が著しくなった。即ち宗教哲学の名の下に理解されてきたところのものがそれである」、「他の方面の考察から定められた原理を宗教に適用してこれを解釈せんとする」「宗教の事実を牽強付会し、それの研究に拘束を加えることになりはしないか」（176）
「一定の宗教的信仰のみならず、また一定の哲学的学説の羈絆を脱して、自由に、事実を重んずる経験的方法をもって宗教を究明する科学の必要を論じた。宗教学はかくして興ったのである」、「十九世紀の後半」（177）
「かかる思想に対して」「それに一部の真理を認めざるを得ない」、「宗教学が」「過去の多くの宗教哲学的体系の陥った迷妄を指摘し、非難することは正当である。ただしながらそのことは、宗教の一切の哲学的考察を拒否することであってはならない。ありし宗教哲学に向かっての非難は、あるべき宗教哲学に対する排斥を意味してはならないのである」、「あらゆる哲学的研究を斥けようとするという主張そのものが既に、一定の哲学的前提の下において初めて可能になるということである。即ち一切の哲学的態度の排斥は、それ自身一つの哲学的立場に立つことを意味する」、「本質」「原理」「根本的ということが哲学の特質である」（177）
「実証主義」「それ自身一つの哲学説であるのではないか」
「実証主義が結局は宗教の否認に終わりはしないかを恐れる」、「宗教に反対する現実主義の哲学的表白とも見なすべきであろう。実証主義に従えば、在るものはただ事実のみ」、「宗教の最も根本的な特色はそれの超越的傾向に存在する」、「現実の世界を遙かに超えて」「宗教は必然的に理想主義に立脚する」、「現実主義を出で得ぬ実証主義が」（178）「それを否認し排斥し、進んでは自らそれに代ろうとするのは、余りに理の当然なこと」、「十九世紀において勢力を得た実証主義は、事実、その通りのことを行おうとしたのである」、「宗教はもはや無用の長物である。寧ろそれは迷妄であり、誤謬である」、「かかる予想をもって臨むとき、宗教哲学はむろん存在し得ないに相違ない」（179）
「実証主義は経験的事実の尊重主張しながら、陰に一定の哲学的立場に立って、事実に暴力を加えるものではないか。それは宗教の研究に先立って、既に宗教について定説を抱くものである。要するに実証主義は独断論である。」（179）
「何よりも第一にこの事実を尊重しなければならない。そのことは」「宗教哲学を排斥するという偏見を除き、宗教の哲学的考察の可能の余地を承認することとなるであろう」
「宗教哲学の可能性は示された」「宗教哲学が宗教研究の全体系において、いかなる必然的位置を占めるか」、「宗教の学的研究は、これを特殊宗教の研究と宗教一般的研究との二つの大別することができる」
「宗教という語は普遍的称呼に属する」、「現実に存在する宗教、人々に力と慰めとを与える生ける宗教は」「一定の具体的内容をもったものである」「事実存在するは特殊宗教

である」（180）
「共通なる本質を明らかにせんとするは、彼らの権利であり、また義務でもあろう」、「しかしながら、嘗て十八世紀の学者がなしたように、かかる反省の産物を唯一の真の宗教と認め、歴史において存在する特殊宗教を閑却し、排斥するということは恐るべき迷誤である」「芸術論が芸術でないように宗教論は宗教ではない。」「活きた宗教は特殊宗教である」「具体的、個性的宗教の具体的、個性的なる変化発展の跡を、ありのままに認識せんとするのが、宗教史である。」「それは、宗教の学的研究の出発点はであり、また基礎である」（181）
「歴史及び歴史学の本質の考察より必然的に帰結」「十九世紀は」「歴史の研究において驚くべき進歩を遂げた」（181）、「西南学派」「ヴィンデルバンド」「リッケルト」「歴史学と自然科学との差違を明瞭にした」、「大体の傾向と主張とには同意せねばならない」（182）
「第一、歴史の世界は個体の世界である」「歴史の任務は」「一回的なもの、繰り返されざるもの、個性を把捉し、記述するにある」（182）
「第二、歴史の世界は価値の世界である」、「認識は」「模写ではない」「選択を意味する」、「一定の研究目的に従って取捨選択し、更にそれを組織化し、体系化するところに」「学問は成立する」「現実そのまま、具体的事実のあるがままを記載するということではない」「なし得ない」「歴史においても認識は選択を意味する。ところが歴史が一つの学として客観性を要求するものである以上、それの選択の原理、識別の標準は、必ず普遍妥当性を有するものでなけれなならぬ。」「普遍的文化価値とよばれるおる普遍妥当的価値」「歴史学はこのような価値に関係せしめて事実を選択し、理解しようとする」（183）
「価値に関係せしめるとは」「価値判断する」「価値意識によって経験的事実を評価する」「対象に向かって人格的態度を決定することではなく、理論的認識の目的の上から事実を選抜し、それの間の関係を理解する一つの見方である」
「歴史学とは具体的な個性を具えた現実を、一定の普遍妥当的価値の実現の過程として理解し認識するところの学である」、「歴史の終極の規範なる普遍妥当的価値は、歴史の予想であって問題ではない」、「従って宗教史の予想するところのものを意識的に問題として論究する必要」「そして宗教哲学は」「この任務に当たるものである」（184）
「特殊宗教の研究の第二の部門」「神学」（184）、「一定の特殊宗教の真理性を承認する立場よりその宗教を研究する。それの研究は特定の宗教に対する生きた体験を予想しなければならない」「その宗教及び宗教団体の実際上の生活と事業とに貢献しようとする」「宗教の生と学との総合」（185）
「組織神学の任務は一定の宗教において真理と認められる生内容を概念的体系的に論述するにある」（185）
「生きた自覚を求め理性の是認を必要とする以上、その特殊宗教の本質もしくは真理内容如何の問題は起こらざるを得ない」「このような本質論を中心問題として、それから必然的に導かれる帰結を体系的に論述するのが組織神学である」
「一定の宗教の普遍妥当的なる真理内容を明らかにすべき組織神学は、歴史において、また歴史を通じてそれを究め得ると人々は言うであろう」「一面の真理」「宗教以外の方面から借りて来た原理によって宗教の本質を論ずるということは、避けねばならぬ誤謬である」「事実を尊重し、事実を出発点もしくは基礎としなければならない」、「このことは、

単に事実のみ着目し、あらゆる事実に共通なるもの即ち事実的普遍者を捉えこれを本質と見なすことを意味しない」（186）
「歴史の世界は個性の世界」「反目闘争の世界」「本質を究めようとする者は、単に一個の人、一個の団体の主義や主張に耳を借し終わることなく、これらの抗争し、葛藤する事実の中に深く沈んで、それを解釈し、批判する普遍妥当的な標準を明らかにしねければならぬ」、「あらゆる現象に共通なるものを現す一般概念は、勢いかような勝れたものを除外して、単に平凡なものを示す外ない」「ディレンマ」（187）
「一定の特殊宗教の本質とは、その宗教の歴史に属するすべての現象に、直接間接に、結局的消極的にもしくは意識的無意識的に関係して、それの意味をなす目的としての価値内容である。」（187）、「それは事実からの概括ではなく、却って事実批判の規範である」「それは一つの目的論的概念である」（188）
「本質」「目的論的概念」
「組織神学は一定の宗教の真理内容を肯定し、これを体系的に論述するの任務を有する」「それは本質を」「永遠の相の下に観なければならない」、「組織神学が一定の時を超越すべきことを示す」「一定の宗教の真理内容の論究に当たって可能なる時の全体を含めて考察しなければならない」、「過去の事実の批判の標準であるばかりでなく、またその宗教の将来の発展の全体に対して、その真精神、原動力、実現せられるべき目的という意味をものべきである」「過去は既に成りしもの、未来は将に創造せられるべきものである」（188）
「本質は」「一歩を進めて意志に対する目的もしくは理想となる。組織神学は一定の歴史的宗教に、それの限りなき努力の永劫の目的、永遠の理想を授けねばならぬ。要するにそれは、可能なる時の全体に亘って、特定の宗教の具体的、個性的なる本質を肯定し、主張するものとなるわけである」（189）
「組織神学は一定の特殊宗教の具体的、個性的なる生内容を承認し、主張する」「もはや単なる学ではないであろう」「むしろ行為もしくは生に属する」「私たちはそれを確信または信仰の名を以て呼んでいる」、「しかしながら、盲信ではなく理性に基づくもの」「であることを主張する以上、」「私たちは」「宗教的真理の普遍妥当性の根源に至られねばならないのである」、「私たちは一切の時、すべての個体を超えて、あらゆる歴史的宗教に当てはまる宗教一般の本質を考察せねばならぬ」（189）、「宗教哲学こそ真に永遠の相の下に宗教の本質を観念する」（190）、「哲学が示す宗教一般の本質、一切の特殊宗教に宗教という意味を与える普遍妥当的な価値内容が、一定の特殊宗教において、いかなる個性を具へて具体的に実現されているかを示すことに組織神学の任務はあり」（190）（組織神学と宗教哲学の関係）
「特殊宗教の研究が、宗教史も神学も、宗教一般の研究としての哲学を予想し、これをまって初めて自己の成立の根底を確かめうること」
「宗教の一般的研究は必ずしも哲学たるを要しないのではないか」、「宗教心理学はまさにかかる非難を提出する」、「十九世紀以来勃興し来ったの経験主義的傾向は、人々に宗教一般の経験的研究を促した」「個人の心的経験」「社会における生活様式」「内的生活及び外的現象」（190）
「宗教心理学は事実の研究である点で宗教史とまったく一致する」「宗教心理学の研究は奨励すべきでもあろう」、「いかなる進歩を遂げようとも、以下に精緻を極めようとも、

宗教心理学は畢竟事実の考察、現象の研究以上に出ることができない。価値の問題、本質の問題は未解決のままに残らねばならないのである」、「経験科学の立場から、自己の研究対象の範囲を厳密に規定することは不可能なことだろうから」「例えばジェームズがなした如く」（191）
「私たちの学的良心は、何が宗教をして宗教たらしむるか、宗教の価値内容とは何かとの問題の解決を私たちに迫るのである。即ち宗教心理学は必然的に宗教性の規範の問題を予想する。そしてこの問題の解決の責を負うものは実に宗教哲学である」（192）

「あらゆる宗教研究についての根本的な反省は、すべて必然的に私たちを宗教哲学へまで導いた」「完成者としての哲学を要求する」、「しかしながら哲学は、万人が等しく承認し研究せるものが、ただ一つ存在するのではない。幾多の哲学説」（192）
「いかなる哲学的見地に立ち、いかなる主義を奉じ、いかなる考え方に従うべきかに関して、あらかじめ私たちの態度を決定しておかねばならない」
「カントによって創出された批判主義」
「批判主義」「長所と特質」「批判哲学以前に専ら行われた宗教哲学上の二つの傾向」「一は主理主義的形而上学」「他は超自然主義」（193）
「主理主義的形而上学」「理論的認識によって実在の根本原理、真の実在、絶対的実在を把捉し得るとする点」「真の実在は宗教の対象たる神と同一視せられる」「宗教哲学の任務は、このような絶対的実在の本性及特質を究明するにある」（193）、「神の存在の証明ということは、宗教哲学の最重要な仕事となる」
「第一、認識論的考察は、私たちに主理主義的形而上学の存在の権利を否定すべきことを教える」、「倫理的意識が経験界を超越して樹てる概念や原理は、存在の世界に対しては当為（Sollen）の意味を有する規範（Norm）である。それらは経験を支配し、整理し、統一し、理論化せんとする思惟の要求の産物であって、実在の模写ではない。」「存在するということは経験し得るということ以外の何物でもないのである。存在判断は」「総合判断である」「存在するという概念は」「形式概念である」「概念なき直観は盲目なると共に、内容なき思想は空虚である。しかして内容は概念から導出すことが出来ず、必ず経験によって与えられねばならない。存在の判断はかような非合理的な内容を得て初めて客観性をもつことが出来る」（194）、「理論的認識によって経験界を超越せる絶対的実在を把捉せんとする形而上学は誤謬でなければならない」、「主理主義的形而上学」「砂上に築かれた楼閣に過ぎないであろう」（195）
「第二」「この立場から考えられる宗教と哲学乃至宗教哲学との関係は、結局宗教の特異性と独立性との否定に至ることを免れがたいのである」「主理主義的形而上学は、哲学の対象たる絶対的実在と宗教の対象となる神を同一視する。哲学と宗教とは、一にして同一なる真の実在を理解する二つの仕方である」、「宗教は要するに哲学のすると同じことをただ一層低き程度においてなすもの、すなわちそれは理論的認識の一種として哲学の不完全なる形であること以上の意味をもち得ないではないか。宗教は劣等なる認識、低級なる哲学」「宗教は民衆の形而上学」「このような帰結は何よりも事実に反対はしないか」（195）
「体験せる者」「最高の真理」「生命の生命」「単なる学問的知識や理論的認識でないことは」「自明のこと」「人格的生活」

「宗教は生の特色ある一方面、全人格をもってする一定の態度として、自己の独立の価値を要求するのである。私たちは何よりもこの事実を尊重せねばならぬ」「真の宗教哲学は、生きた経験としての宗教の真理内容の究明に向かうべきもの」「宗教の権利を基礎付けるべきものでなければならないのである」

「第三」「主理主義的形而上学は」「具体的なる経験内容を超越して普遍的概念に至って初めて満足を見いだすのであるが故に、その必然の帰結として歴史的事実なる宗教の個性の否定となるのである」（196）、「偶然的なもの、単に与えられたるもの、存在の意味なき事実と見なされざるを得ない」「自己の論述する抽象的、普遍的内容のみを真の宗教と考えて」「哲学をもって宗教に代えようとし、また具体的な宗教の個性を否定したのであった。けれども私たちの事実に対する良心は常に鋭敏でなければならない」「宗教の特異性と独立性とを承認せねばならぬ」（197）

「主理主義的形而上学と」「正反対の傾向にあるとも見られるべきは、超自然主義」「超自然主義に従えば」「絶対なる真理は私たちの能力を遙かに超えた、超自然的な啓示によってのみ与えられるのである」「それは実に奇蹟であり、不思議であり、驚異である」「すべての人間に共通の理性に」（197）「よっては得られないのであるから」「預言者、開祖、始祖などなどというが如き、特殊の人物もしくは特別の信経、経典などにおいて行われるのである」

「主理主義的形而上学の二つの欠点を」「補って、自己の長所を発揮すると考える事ができよう」、「個々の歴史的宗教は」「自己の絶対的真理なることを主張し得る」「個性と歴史を肯定し」、「宗教を知識と混同するの恐れがない」「宗教は低級なる学問、不完全なる哲学ではなく、寧ろそれは絶対的実在そのものより来る無上の体験であり」

「次の如き欠点を看過することができない」（198）

「第一」「啓示及び奇蹟」「私たちは」「それらがもつ深い意味を肯定し、尊重しなければならない。しかしながら啓示を認識の特殊の根源と見なし、一定の歴史的宗教に真理性の論述とするということは誤謬である」、「もし啓示的認識にして普遍妥当性を有するならば」「認識たるの資格を具えるものとならねばならぬ」「啓示はこの際、一般認識に対して自己の特権と優越とを誇るべき理由を原理的には奪われてしまうのである」、「もしこれに反して、啓示的認識が他とは全然類を異にした認識であって、一般認識の客観性、普遍妥当性の制約を悉く脱するというのならば、私たちはそれについてもはやなにごとをも議論し得ないであろう」「即ち超自然主義が宗教哲学の立場となることは不可能である」（199）

「第二」「啓示を宗教的真理の理論的根拠として承認」「かかる啓示を主張する宗教は一つのみに限られず、ほとんどすべての歴史的宗教の共通の特徴であるのだから、啓示に基づくということを理由として、特に一定の特殊宗教の個体的内容の絶対的真理性を肯定し、主張することは不可能である」「かくて超自然主義は、歴史及び個性の慎重という自己の勝れた特色ともついに放棄せねばならぬことになるであろう。このような立場は哲学上の基礎極めて薄弱であって、今日はもはや論ずるに足るほどの意味をもたないのである。自己以外の宗教の存在に注意せず、また、することを欲しなかった時代において、超自然主義は、神学とことに密接に関係し、宗教哲学上の一つの立場としての価値をもつことができたにすぎないのである」（200）

（これは、日本・アジアの宗教状況を背景にしていると言えるか？　またバルトなどの弁証法神学への評価に関連するか？）
「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」（200）「と欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の所領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」（201）
「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」（201）
「宗教の特質及び個性を承認しながら」「それについて合理的、普遍妥当的なる議論をなすことが初めてできる」「二つの立場の短所を去ってその長所を合わせ有する」「批判主義の根本的態度より自ら生まれる徳であり、功績である」（202）
「本質的な精神」
「第一、批判主義は形式的理想主義である」「事実から独立に、当に然かあるべしという資格を有する即ち妥当する価値を主張する」「存在よりも当為に、事実よりも規範に重きをおく」、「事実問題ではなく権利問題」「人々は当為もしくは価値の能力を、理性と呼び慣わしてきた。このような理性の立場に立って、批判主義はすべての問題を解決しようとする。即ち批判哲学は理性の哲学であり、批判主義は理想主義である」（202）
「批判主義が形式主義であること」「主理主義は理論的意識が経験を超越して思惟し産出する概念や原理をもって、直ちに絶対的実在の模写であると考える」「内容上の理想主義」、「これに反して、批判主義は自己の論述し、展開する概念や原理が、単に形式的なることを最初から承認する。そしてそれらが経験の提供する非概念的、非合理的内容を待って、また、において、初めて実現を遂げるものであることを主張する」「それは、内容的に充たされねばならない」、「歴史及び経験の提供する個性は、単なる偶然なる事実ではなく、哲学の究明する原理、特に宗教についていえば、宗教の本質の実現のために欠くべからざるものである」、「批判主義は」「歴史と個性との価値を十分に尊重する。しかも後者が盲目的もしくは独断的なるに反して、前者はよくそれらの目的論的必然性を説く」（203）「ことができる」「すべての宗教に、それの特有の意味を与える価値または原理は、理性の普遍的、抽象的形式であるが、まったき充実したる生、命と力に溢れた実在は、具体的非合理的なる個体において初めて求められるのである」（204）
「第二、批判主義は反主知主義である」「諸の文化領域を公平に尊重する」、「理性は」「理論理性」「のみを意味しない」、「普遍妥当的なる価値がある限り」「その根底には理性の存在が承認されねばならぬ。理性とはあらゆる種類の普遍妥当的価値の全体の謂いである。それ故に私たちは理論的ならざる理性の存在と権利とを十分に肯定する」、「宗教は、主知主義の人々が誤って観念するように、知識の変形もしくは不完全なる知識ではなく、私

たちに対しては、理性の特色ある一領域として、自己の独立性を確保することができるのである。」(204)

「本論」「批判主義の宗教哲学の根本問題は、宗教一般の本質の究明である」、「本質」、「事実に関する問題に答える概念ではなくて、あらゆる宗教が、いかなる形においてか、またいかなる程度においてか、実現せんとする目的と解された、価値もしくは原理を現す目的論的概念である」、「本質とは普遍妥当的なる価値の原理、宗教と名付けられる事実に、然か名付けられるべき権利を与える価値内容の謂いである」(205)、「一方においては宗教を他の文化領域と区別してそれを特異」(205)「性、従って独立性を確立し、他方においては宗教を理性に基づけるものとして、それの普遍妥当性を確立し得るは明瞭である」、「宗教に、理性生活の総体において、一切の普遍妥当的価値の全体系において、一定の必然的位置を与えることができるに相違ない」、「私たちはそれの真理性と存在の権利とを基礎づけ得るのである」、「二点を注意」

＜宗教学(1922)＞
＜プロティノスとカント――宗教哲学の二つの任務（1925）＞

＜『宗教哲学序論』(1940）＞
A．ポイント
序
「現代は決して宗教に対する学問的関心を欠いているとは思われぬ」「新しい神学」
「宗教の哲学的研究が量的にも質的にも痛ましいまでに貧弱」「宗教哲学の方法論的自己認識の不足」「宗教」「に対して哲学は取るべき態度について十分の自覚と自信とを有せず」
「宗教哲学は宗教的体験の理論的回顧それの反省的自己理解」「この唯一の正しき態度」(245)
「本書は「宗教哲学」を方法論的観点より補う」「一種の循環論に相違ないが、循環論は哲学においてはむしろ体系と名付けうるものの必然的属性に過ぎぬ」(246)

第一章　宗教学と宗教哲学　実証主義
一
「宗教学」「語義上」「宗教に関する乃至は宗教を対象とする学を意味する」
「学の性格はいかなる事柄（対象）をいかなる仕方（態度方法）を以つて取扱うか（研究するか）によつて定まる」「決定的意義を有するは後者」「しかしながら」「本質上互に相呼応する内面的連関が両者の間に成立つ」(247)
「取扱い方態度方法の観点より、問題の検討を行なうと思う」「経験的科学とは異なって、少なくとも異なった程度において」(248)

二
「「宗教学」という語」

「理神論」「ヘーゲルの「宗教哲学」において」（248）
「十九世紀の半ば」「「宗教学」という語は特殊の新しい含意を示唆するものとして用いはじめられた」「神学、次では宗教哲学、と特に区別される新しき特殊の学的研究として「宗教学」と解し、その名の旗印のもとに同士相呼集り或いは国際的にも及ぶ精神的団結を結びつつ、学会の大勢を支配するに至った」「必しも正面より神学乃至特に哲学を否定や排除するのではなく、かくの如き態度を自覚的に取るものはむしろ極めて少数に過ぎぬとさえいい得よう」「意識的に乃至多くの場合むしろ無意識的に彼らの大多数を支配した一定の態度心構え、即ち、宗教の経験科学的研究という制限されたる特殊な意味に「宗教学」を解し排他的の含意をもつてこれを宗教の学的研究の中心に据え、厳密の意味の学問はかくの如きものでかければならぬとする傾向」「この精神的傾向こそが吾々が特に検討の的としようとする所のものである」（249）
「その中心に根底に一個の哲学的立場が原理として存在しつつすべてを活かす」「「学的」と「経験科学的」を同一視する立場であり、通常実証主義（Positivismus）という哲学的術語を以つて呼ばれるもの」「コント」「実証主義的宗教研究は必然的帰結として宗教の否定に導く」「宗教の事実を曲解し歪曲する」（250）

三
「実証主義の基本的の教は、一切の認識一切の学問は事実――勿論経験的感性的事実――のそれに尽きる、事実の言表はしに厳密に還元し得ぬ命題は全く無意義であるというに存す」「認識の任務と能力を事実の領分に限局し、事実の確立及び結合以外には一歩も踏出してはならぬと主張」
「まず事実の事実性（事実であること）に重心が置かれ更に事実相互の間の関係に関心が向けられる。コントの如きは特に第二の点を重要視し、単に事実を確立するに止まらず進んで事実の間に存在する止まらず進んで事実の間に存在する恒常的関係即ち法則を極めてことを究めることを学問の中心的任務を説き」（251）「経験主義」「とは区別すべきことを強調した」
「要するに事実――特殊的にせよ普遍的にせよ――事実の領域に認識及び学問を厳重に縛り付けようとするのが実証主義の基本的態度である」
「認識に関するこの制限は存在にも当然当てはまる。事実として認識し得るものの外に実在はないのである」「「観察」即ち感性的知覚」「に根拠を有せぬ観念を空想の産物として斥けた」
「空想の産物を実在と誤信する段階」「「神学的」段階」「超自然的な実在者があるように」「第二の「形而上学的」段階においては、かかる擬人的実在の代りに嘲笑的概念例えば本質や原因などの諸概念がそれ自ら実在するものとして立てられた」「これらの架空の妄想を駆逐することが実証主義の重要な任務の一である」（252）
「事実性が認識及び存在の究極の原理である所には相対主義は避け難き帰結である」
「認識が第一に主体即ち認識の器官に適応していること、第二に人類の歴史的発展において各時代各段階の社会的文化的情況に必然的に連関し依存しており従つて固定的でなく流動的」「彼はまた positif（実証的）という語の新しき意義」「特殊の意義として「相対的」（relatif）を挙げた」

「彼が明白に説いたのはいわば認識論的相対主義に過ぎなかった」「これは第一に認識乃至学問において絶対的真理を求めたり主張したりするの愚を排し」「偏狭固陋の独断論的態度を和らげて余裕ある一種の精神的雰囲気を作り出す効果を有するには相違ないが」
「しかしながら」「もしこの相対主義を存在論の方向の徹底せしめたならば、濃厚なる自然主義的特色を呈する相対主義が実証主義の必然的帰結としてその姿を現わすに至るは必定であろう」
「事実の事実性即ち事実は自己にあらざるもの、他者、に対してそれを自己の中に容れるを拒みつつ自己を貫こうとする存在、自己主張排他抵抗などにおいて成立つ存在である」(253)「事実性の側より観たる事実は他を容れざる従って外面的存在である」「他者との関係」「実在性としての存在にはこの意味の「関係」ははじめより拒まれている」「かくの如きは、孤立の位置に身を置く、否置こうというかいなき努力に自らを欺く、人間主体の架空の幻想の投影に過ぎぬであろう」「自然的存在は、かかる排他的存在以上に一歩をも出でぬ。かかる外面的関係においてこそ事実の事実性は成立つのである」「最も厳密なる本来的なる意味において相対的（即ち関係的 relatif）存在である」「単純正味の相対性、直接的関係性がそれの実体である」
「事実が経験的であり感性的知覚によって知られるということも、従って認識の相対性も」
「この存在の相対性の一面即ち主体の体験へと向かう一面に過ぎぬ」
「相対主義」「原始的直接的なる従って自然的なる存在しか認め得ぬ点においてそれは自然主義でもある」(254)

四
「相対主義は宗教の指向する所それの内面的意味とは断然相容れぬ。宗教において主体（自我）の対手としてそれに関係交渉に立つものは、それの存在の性格より観れば、絶対的実在者と呼ぶべきものである」「宗教自らの言葉ではそれは「神聖性」と呼ばれる」
「それとの接触は他のものにとっては全くの破壊を意味するもの、絶対的に侵すべからざるもの、一切を無に帰せしめるもの」「何ものとも直接的なる従って外面的な関係に立たぬもの」「絶対的実在性を主張貫徹するもの」「自然的直接的関係を根本より覆滅しつつ更に高次の関係を定立するであろうとは期待されねばならぬが」
「事実の事実性に重心を置く実証主義の立場よりしては、それの排斥拒否こそ当然の帰結」(255)
「彼に従えば宗教の本質は、絶対性を有する擬人的実在者を一切の存在の原因として肯定し、しかして内容に関してと同様に妥当性に関しても等しくそれの絶対性を主張する思想乃至認識に存する、といい得るであろう。かれはかく解されたる宗教を露骨に正面より否定したのではなく、かれの持論たる認識相対主義に従って、正しき認識乃至学問の未だ存在しなかった幼稚未開の社会において生活を指導する役目を果たし得たものとして、それに歴史的意義並びに価値を許したに相違ないが」「実質的には宗教の否定こそこの説の精神であるといふべきである」「コントが晩年理想主義的色彩を示す一種の宗教所謂「人類教」を説いたことは」(256)、「初期の説とは矛盾する方向への転向」
「等しく実証主義の立場に立った Ludwig Feuerbach が宗教の対象の実在性を否定したのはむしろ率直なる徹底したる態度と賞賛すべきである」

「宗教の真理性を承認し得ぬ実証主義者も宗教の事実性は肯定せざるを得ぬ。かくて事実としての宗教の説明」「人間学的観点よりの宗教の理解はかれらの避け難き課題をなすに至る。かれらの立場においては人間もまた、外面的関係に立つ」「外面的存在者として単に自然的生を生きるに過ぎぬ。自己以外のものに対して直接的に自己の存在を貫徹しようとする単純率直なる動作がかかる生の真の姿である」「基本的動作は」「感性的幸福、幸福というよりむしろ享楽というべきもの以外に目的を有し得ぬであろう」「他を排しつつ自己を主張しあふ、個人以外のものではあり得るであろう」「そこまでの徹底は事実上至難の業であるゆえ、実証主義者は内命的体験の要求をも加味し」（257）、「精神的歴史的生をも考慮に入れ、場合によってはそれに重心を置くという態度」
「自らの本領を全く放棄せぬ限り実証主義は外面的存在に重心を置く自然主義」「従って」「自己の自然的存在の貫徹を主張する幸福主義でなければならぬ」「しかるに宗教に最も固有なる本質的なる傾向は幸福主義の克服である」「宗教はあくまでも自ら究極の目的であること」「人生における最高位を占めることを主張せねばならぬ。宗教の独立性の不承認はそれの特異性の否定に等しい。この場合人生の目的に従って宗教の理解の原理が何に置かれるか、例えば道徳の実現にか文化の発展にか人類の幸福の達成にか、は原理的には何の相違ももたらさぬ」「目的手段の連関」（258）
「コントは「実証的」（positiv）という語の一つの意義として「有益」を挙げ」「擬人的世界観も、それに適応する文化の状態並びに社会の情況においては、役に立つことを強調している」「フォイエルバッハもさらに率直にさらに明白に宗教の虚偽性を表明しそれを幸福欲より導き出そうとした」「実践的なものの手段」「宗教もかかる方便の嘘の一に数えその目的を道徳に置いた」（259）

五
「実証主義の中枢に虫食う」「明白なる自家撞着的態度」
「一切の認識を事実の確立と結合とに」「釘づけしようとするものが一定の哲学説を説くのがすでに矛盾である」「認識の事実を超えてそれの本質を、即ち、それがいかにあるかではなく、いかにあるべき筈であるかを、認識の真の「あり」を、場合によっては事実的「あり」に反対してまでも主張しようとするものであって、実証主義としては勿論少くも許し難き僭越である」
「実証主義は明らかに宗教の本質を論じている。しかもその本質論は宗教の事実が有する内容、それが内に含む意味、それが志す所を予め否定して掛かる、即ち事実の研究に取り掛かる前に予めすでに事実を無きものにしようとする成心と敵意とを抱く、極めて独断的なる事実無視の態度を取るものである」（260）
「「宗教学」の旗印の下に宗教の学的研究に従事する人々」「かかる病毒に感染している」「それらの人々の態度が原理的に誤っていること」
「かくて実証的経験的科学としての宗教研究は、宗教の特異性従ってそれの含む内面的意味の否認の前提のもとに」「政治的道徳的教育的そのほかの文化的目的のための有益なる道具または方便に対すると同じき、好奇的乃至利用的関心をもってなされる仕事に過ぎぬ」（261）
「しかしながら翻って考えれば、実証主義が綱領の第一位に掲げる事実の尊重はたしかに

正しき態度である」「宗教の学的研究は事実を与えられるままより出発し」「先ず第一歩としては経験的科学として成立たねばならぬのは殆ど自明の真理である」
「誤謬は事実の尊重そのことにおいてではなく、尊重の仕方において存するのである」「二種の幾分異なった傾向」「一は哲学者たちのそれであり、事実の尊重より出発し相対主義自然主義幸福主義を経由して宗教の否認に到達する」「宗教をそれ自身には意味も精神もなき単なる外面的事実として取扱おうとする科学者たちは、哲学者たちの如く露骨に矛盾を暴露せぬにしても」「同一なる哲学的態度を示すこと」(262)、「経験科学的以上の研究に同意を肯んぜぬ点において彼らも哲学者と同じく事実尊重の原理を歪曲されたる形においてのみ抱いていることを示すのである」(263)

六

「事実尊重の正しき仕方を理解し得るがため、事実を構成する二つの要素（又は契機）に注目すべく促される」「すべての事実は事実性と内容との二つの要素より成る」「事実性によって事実は他のもの」「に対して内容としてその中に取入れられるを拒む独立なる存在である」「そのことは」「いわば漠然たる形式的の事柄に過ぎぬ」「事実については吾々はそれが何であるかを問わずにおられぬ」「内容はいつも主体との生の連関において立ち、体験の内容をなすことによって事実の内容をなす」(263)、「内容にとっては理解されるということが本質的である。それ故それはまた意味と名づけることができる」
「事実性によってそれは外面的存在の内容をなすが、それ自らとしてのそれの存在は内面的である」「外面的なものと内面的なものとは事実の欠くべからざる離すべからざる二つの要素である」「両者のいづれかに特に注意を向けいづれかに特に重心を置くことはできる」「認識の仕方に従って学問（この場合は経験的科学）に二つの異なった方向従って二つの異なった類型が成立つ。自然科学と精神科学」

「自然科学」「事実性に重心を置きその方向に力を集中する」「極限をいえば内容無き事実性」「内容をできるだけ希薄にして内容無き事実性の極限への接近を計る」「事実性は外面的関係において成立つ」「単純なる平等なる内容的要素の外面的（この場合は時間的空間的）接触及び交渉において成立つのである」(264)

「もし自然科学の原理の徹底化によって哲学が成立つたとするならば」(264)「内容無き事実性の認識以外にあり得ず」「かくの如き哲学」「は自然科学の世界観に絶対性を付与するという許すべからざる僭越行為によって得られたる架空の空想であって」「実証主義の主張する事実の尊重は畢竟自然科学の意味のそれであり、かかる背景のもとに行われる経験科学的研究は自然科学の精神と態度とをもってするそれであること」「許すべからざる飛躍なしには自然科学より哲学に進み得ぬことを示唆する」「ましてや宗教より内面的存在固有の内容及び意味を拭い去り、外面的存在として又外面的関係においてそれを処理しようとする態度は、自然科学の精神を許すべからざる範囲にまで拡張したるものでなくて何であろうか」(265)

「精神科学は事実の内容に重心を置く。内容は体験との連関においてのみ存在するゆえ、主観性はそれの欠くべからざる特徴である」「それが通常心理学と呼ばれるものと必しも同一でないこと」「経験的科学である以上精神科学も事実を対象となし事実性をいつも必要事項として取上げるのであるが」「眼目とする所はむしろ事実の含む内容と意味とに存

する」「内容の尊重は個性の尊重である故、宗教の歴史科学即ち宗教史は精神科学としての宗教学」「において基礎的意義を有する学科となろう。それより進んでは宗教の事実を内容の共通的傾向という観点より体系的に研究することも可能であり又必要であろう」（266）

「精神科学を内容の方向に徹底させたならばいずこへ行着くであろうか」「理解はいつも内容の共通性を要求する。異なるものが相連関し相一致する所において又そこを通じて理解は行われる。しかるに事実の内容の理解は事実性の制約のもとに従って外面的排他的限定のもとに行われねばならぬ。それ故かかる外面的限定の超越及び克服は理解の可能及び進展の必須条件でなければならぬ」「この方向に歩み始める」「事実性が全く超越されるべき限界線」「最後の一歩をもって断然この限界線を通り過ぎ純粋の意味の世界に踏入るのが哲学である」「このことは可能である」「何となれば内容の方向に進む主体にとっては事実性も限定を意味する特殊の内容に過ぎぬから。すなわち内容が事実性の制約のもとに立つ間は、それの「あり」は、これ乃至これの又はかれ乃至かれの、ここ又はかしこ、この時又はかの時などの互に相容れぬ外面的規定に従う。内容は未だそれ自らとしてとらえられるに至らぬ」「かかる制約かかる特殊の内容規定を離脱したる自由の境地を求めねばならず」（267）、「事実の内容そのものに内在する内面的要求の、貫徹に外ならぬ」「互に連関と一致を拒む排他的なるいくつもの映像として成立つ物の姿を、本来の単一なる真のあり方において見ようとするのが」「プラトンの用語を借りるならば」「物の真の存在（ontos　on）物の本質（ousia）を見ようとするのが哲学である。吾々はこの意味の哲学的理解を宗教に関して要求する」（568）

第二章　誤れる宗教哲学

一　合理主義

七

「カントが」「に至ったまでは」「宗教哲学は宗教の対象」「を、通俗的にいえば神を、捉え来つて直接に理論的論究の対象となす哲学であった」「一般認識の方法を」「そのまま神に適用する」（269）

「合理主義」「神を直接の対象としようとする即ち神の学であろうとする点より、かかる哲学はアリストテレス以来「神学」とも呼ばれた」「一般認識と共通の方法によることは、又人間が本性によって、乃至本来即ち自然的に、所有する理性によることである故、この「合理的神学」（rationale Theologie）はまた「自然的神学」（naturakiche Theologie, theologia naturalis）とも名づけられた」「プラトン以来乃至それ以前よりの歴史」「トマス・アクィナス」「神の実在性の証明は神学の全体系を支える緊要欠くべからざる礎石と考えられた」「人間の認識は感性的知覚にはじまり感性的に与えられる事物を最も近き対象として有する故、感性を超越する神の存在は証明によってはじめて到達されるのである」「一旦神の存在が確立された以上は、哲学は更に進んで神が何であるかを」（270）、「例えばその永遠性単一性無限性などを、又世界、しかして特に人間との関係を論究すべき勤務を有する」「これがカント哲学の出現まで一般に行われた宗教哲学の大体の構造である」「合理主義の宗教哲学」「ヘーゲルの如きでさえ、この点に関してなお旧套を脱しきれなかった」（271）

八

「認識の直接の対象は観念的存在観念的内容である。実在は決して主体（自我）の中に入り来らず、認識はいつも表象や概念の内容において乃至それを通じてのみ行われる」「他の何ものの中にも入らず他者に対して自己を主張貫徹しようとする」「実在者との接触交渉に際して観念者は実在的他者の象徴、それを代表する記号、それの語る言葉の資格を得る。直接の体験より反省に進むびつれて勿論観念者と実在者との間に一種の隔りは生ずるが」（271）、「その隔りを克服し内容の象徴性を或は維持し或は設定することに認識の任務が存する」「観念の実在的象徴性は実在の認識における動かすべからざる基本的原理である」「吾々の日常生活吾々の自然的並びに文化的生活はこの原理の承認の上に立ち、誤謬の排斥も修正もこの前提の下においてのみ意義をもつ事柄である。反省される場合には象徴性は間接的となるであろうが、思惟の根源である体験にまで溯ればそれは直接的である」「自然的実在に関する限り、象徴と実在との関係は一義的直線的連続的である。かくあるが故にこそ、感性的経験の具体的内容より遠ざかる抽象的概念（例えば法則）や観念と観念との関係を整理するに過ぎぬ論理的工作がなお実在的妥当性を保ち得るのである」「もし観念的内容が一義的直線的連続的に従ってこの意味において直接的に実在の象徴たるの資格を有せぬならば、自然の認識にもとづく自然の支配あらゆる技術あらゆる物質的文化否あらゆる文化は忽ち消え失せねばならぬであろう」（272）

「この直接的象徴性は宗教の対象にも当てはまるであろうか」「カントは実在の全面的の不可認識性を認識論的に証明することによって、神の不可認識性従って合理的自然的神学の不可能性をも証明し得ると信じた」「しかしながら」「考察を理論的認識のみに局限し、仮に実在に達する道があるとするならばそれは理論的認識を通じての外はあり得ぬいうが如き態度を取るのは、排撃に取掛かる前にすでに対手の捕虜となっているがいるに等しくはなかろうか」「カントの立てた神の概念は一切の存在の総体を内容となし、従って理論的認識のいつも変らぬ究極の理想を言表わしたものに外ならぬ。彼は神を対象とする認識の不成立をこの理想に到達し得ぬ人間の認識能力の不完全にのみ帰し、もし理性が直線的となり得るならば神を認識し得るであろうと考えた。トマス・アクィナスに源を有するこの思想は、理論的認識の道を行くべき所まで行けば神に行着くという信念の上に立つものであって」「合理主義の思想である」

「カントが観念主義的認識論の立場に立ちながら Ding an sich（物自体）の名の下に実在の概念の有意味を肯定したことは」（273）「むしろ賞賛に値する。観念のみの世界というが如きは空想と現実との区別を忘れた哲学者の誇大妄想に過ぎぬというべきであろう」「純粋なる反省の立場」「においてはもとより「物自体」は矛盾の概念に過ぎぬであろう」「観念主義の放棄の必要性」「実在の体験をもっと素直に承認し、もっと徹底的に考慮すること」

「実在はカントの語を借りるならば「物自体」である。すなわちそれは主体の中に入り観念的内容となるを断然拒むものである。しかしながら実在との交通が行われることは生そのものの基本的事実である。しかしてその交通は観念者としてしかも実在者を、実在的他者を、代表する象徴において又それを通じてのみ行われる。認識はかくの如き象徴性を保有することによって実在的妥当性を獲得する」「それ故神が理論的認識の対象であるか否かは、吾々の表象や思惟がそれ自らとしてそれ自らの意味する所をもって一義的直接的

に宗教の対象の象徴たる資格を有するか否かによって決せられねばならぬ。かくて問題の解決の鍵は、理論的認識のみを眼中に置く認識論によってにあらず、宗教的体験をも視野に収めそれの固有の特異性を考察に入れる包括的なる人間学的論究によってのみ与えられる」（274）

「宗教的体験の対象の最も基本的なる特徴は、宗教自らの言葉を用いるならば「神聖性」である」「神は人間の力をもって到底処理し得ぬものであると」「神は人間の認識能力を全く超越することである」「神は主体にとって実在者であり実在的他者であるが」「主体への超越性を保ち徹頭徹尾他者性に留る点において、それの実在性は純粋又は絶対的と名づくべきものである」「尤も神は自己を啓示する」「従って吾々は何等たの仕方で神を知る」「「知る」という働きは自然的実在の理論的認識の場合と同様に象徴によって即ちこの場合は神の言葉によって行われる」「「知る」は自然的実在においてのそれとは全く類を異にする。この場合の象徴は理論的認識においての如く一義的直接的に実在を代表するものではない」「理論的認識においてと同じ働きが象徴に加えられるに相違ないが、かくの如き働きは形式的には理論的意義を有するであろうが」（275）、「決して神という実在者の理論的認識という意義を担うものではなく、むしろ譬喩的表現の部類に属すべきものである」「それが神を一義的直接的に即ち言葉通り文字通りに言表はすものではなく、全く表現を拒むものの覚束なき表現の試みに過ぎぬことを知らねばならぬ。神聖なるものの語る最初の言葉は「無」である」

「観念的存在を通じて吾々に語り掛けた自然的実在者ももはやその自らの言葉を語らず、それの象徴たる意味を担った表象や概念もその資格を全く失うに至る。これが宗教的体験の光に照らされた生及び世界の真の姿、姿なき姿である。この「無」の地に啓示はさらに積極的に種々の像を織出すであろうが、かかる観念的内容はもはや一義的直接的にはいかなる実在者の象徴でもあり得ず、即ちそれ自らの資格においては全く象徴性を失うのである」（276）

「「宗教と呪術」の複雑なる問題の議論」「呪術が宗教と同じように尋常の標準を超えたる極めて強き不可思議なる力と関係あるにも拘わらず、宗教と区別されるのは、そこにはその力と人間の主体との間に一義的直接的なる連関が存するからである」「呪術は認識にもとづく応用的なる実践的技術の部類に属するのである」「科学と呪術との類縁を説いた Frazer 一派の学説はこの点に関する限りたしかに真理の一面を捉え得たというべきである」（277）

九

「神の不可認識性は宗教の特異性の必然的帰結である」「合理主義の誤謬が宗教の特異性の無視に存する」（277）

「合理主義が正しいとするならば、神の理論的認識以外に宗教が固有の存在を保ることは無意義とならねばならぬ。哲学と宗教とが全く同一任務を果たすべきであり又果たし得るものならば」「この立場を当然の方向に徹底するならば必然的帰結は宗教の否定でなければならぬであろう」

「ここに宗教を肯定するという前提のもとに両者の関係を調節し規定することが必要になろう」「最も簡単なる解決は」「「自然的神学」を」「唯一の真の宗教と高圧的に宣言し、「啓

示宗教」を」「否認することであろう」「理神教(Deismus)」「この傾向の最も普通に行われる形は、宗教を変質したる又は俗見と妥協を遂げた低級なる又は間に合わせの哲学となすものである」「ギリシアの思想家たち、オリゲネス」(278)、「近世ではヘーゲルなど」「人類の歴史的発展において必要なる準備教育の段階と解したレッシング」「実証主義とは全く正反対の態度を取りながら、この立場の必然的帰結も宗教の特異性と従ってその独立性との否定に外ならぬ」

「かくて吾々はあらゆる囚われたる偏見より自由になり、宗教の内面的意味内容を尊重しつつ虚心坦懐それの研究に向う哲学的立場を要求せねばならぬに至る」(279)

二　超自然主義

一〇

「しかして超自然主義はその要求を充たすかに見える」「シュライエルマッヘル以来用い慣れた新しい語義においての神学」(279)、「個々特殊宗教の立場において自己の教義の理論的展開根拠付け弁護等を任務とする学問という意味の神学」「合理主義とは対立の関係に立ち全く異なる傾向を示しながら、宗教の対象を直接に理論的認識の対象とする点においては共通なる哲学的意義を有し従ってここに宗教哲学の一つの立場として検討される資格を有する」「歴史的宗教の」「随伴現象として存在」「学問的体系的の形態を示すものは単独には成立ち難く合理主義と結合して存在する」「トマス・アクィナスは最も影響深き模範」

「この立場は神の超越性を基本原理とする」「人間本来の認識能力即ち理性を全く超越する」「人間の有限性より」「罪悪より」「超自然的啓示が」「神の恵みによって」「与えられる」(280)

「全く不思議不可解の出来事であるゆえ、驚異（奇蹟）」「絶対的権威」「かかる権威に服従して真と承認する働きが信仰である」「超自然と自然、啓示と理性、信と知との対立及び峻別はかくの如く神の超越性と緊密なる連関を保ちつつ超自然主義の中心思想をないしている」

「神の超越性とそれに基づく啓示とはすべての活きた宗教に共通なる特色最も鮮やかなる基本的観念」「宗教の権利の擁護の建設的努力」「しかしながら吾々の論題である認識の超自然主義はこの生の超自然主義とは混同を」(281)「許さぬ全く別個の現象である」「神学の一個の立場としての超自然主義は神即ち宗教的対象について直接に理論的認識を得ようとする」「文字通り神に関する学」「その目的は神を直接の対象となしつつ一般の理論的認識と同じくその対象について概念的思惟による理論的判断を獲得するに存する」

「場合によっては自然科学その他専門的諸学を無視乃至排斥してまでも、超自然的啓示による、従って例えば特殊経典の文字そのままに従う、理解や説明を押通そうとする暴挙にまで退化する」「啓示的認識の一般の理論的認識と異なる点は目的と本質とにおいてではなく単に方法においてのみ存する。その方法は啓示と信仰との両概念によって言表されるものである」「権威に対する服従」(282)

「超自然主義の神学が神を直接に理論的認識の対象としていること」「合理主義の自然的神学と全く同一の態度を取る」「疑わず問わずただひたすらいわば盲従的に、権威に服従するを意味する信仰と相俟って、極めて幼稚なる認識方法」「学校教育上教科書が無知

なる生徒に対して有する権威と原理的に同一部類に属する」（283）「超自然主義は畢竟不徹底なる、己の力の及び難き確実性を誇称する点においては僭越なる、しかして啓示の神々しき仮面を被つて己れの醜悪を掩わんとする点においては冒涜的なる、合理主義の一変態でなくして何であろうか」（284）

一一

「それの単独純粋に近き形態に出会い得ぬ事実」「啓示による認識以外理性による自然的認識を何らかの形何らかの程度において承認することが必要になる」「信と知との問題は畢竟かかる妥協乃至総合の問題に外ならぬ」「二つの異なった方法」「アンセルムス」「トマス・アクィナス」「アンセルムスの教は信仰と認識との全面的一致を説く」（284）
「信は知に対して自己固有の独立性と優越性を保有する。しかしながら吾々は信に立止まってはならぬ、進んで同じ内容同じ対象を理性の力によって理解し認識せねばならぬ。「「」われ知らんがために信ず」（credo ut intelligam）の真の意味」「しかしながら信と知との核の如き一致はアンセルムスにとって」「一個の信仰に過ぎなかった」「彼の証明の理論的価値を承認し得ぬもの、かくの如き商況の可能性を原理的に拒むもの、に対してはその事実は理論的には全く無力といわねばならぬ」（285）
「トマス・アクィナス」「「理性より」（ex ratione）と「理性を超えて」（supra rationem）との区別」「一は人間の理性を超越するもの、他は自然的理性が固有の力をもって把握し得るもの」「あらゆる感性を超越する神の本質は同時に認識をも超越する」「しかしながら」「すべて感性的なもの世界のあらゆる存在は結果として原因たる神に依存する故、吾々は仕業より推してその根源である限りにおいて神を認識し得る」「一切の事物の第一原因としての神の存在（実在性）」「これら両種類の認識は断然混同を許さぬが、他方又没交渉や単なる反対を許さぬものである。「理性を超えて」は決して「理性に反して」を意味せぬ」「両種の認識の間に一致乃至協力の関係が存在せねばならぬ」（286）
「両者の一致」「第一。自然的理性が独力によって達し得る諸真理は信仰に近道を通じても等しく与えられる。第二。自然的理性は啓示的真理を厳密の意味において証明することは不可能であるが、種々の蓋然的論拠を提供して幾分の援助を与えることは可能である。殊に反対論者の論拠を反駁することによって間接的に真理の認識に寄与する。第三。超理性的啓示の必要は理性の論拠によって従って合理的に認識される」「トマスに従えば理性は自己に許されたる自由と独立性とを働かせることによってむしろ自制と従順にの必要を自覚するのである」「穏健なる部分的協力が体系的連関において一応理論的根拠付けを見出している」（287）
「理論的体系的優越性」「しかしながら超自然主義と合理主義とは歩み寄りにより互いの欠点を幾分糊塗するには成功したものの、それを除去することは全く不成功におわった」「合理主義は超自然主義の土台石の役を務めることによって本来の性格を改めるに至らず、しかして超自然主義は変装したる合理主義に過ぎぬことは、両者が妥協を遂げ得たことによってむしろ明瞭になった嫌いがある」（288）

一二

「この破綻を幾分なりとも緩和するに役立つたものがある」（288）「ギリシア哲学の影響

のもとに合理主義の従って哲学思想の体系に組入れられたものである。認識の理想に関する教がそれである」
「キリスト教において人間の生の完成状態としてその永遠の生の内容として「神を見る」ことがはじめより説かれていた。しかるに他方ギリシアの哲学思想においては認識の本質は「見る」働き即ち直観に置かれた」「認識の働きが本質上観る働きであるならば、推理も一歩一歩は直観である」「観る働きも観られるすがたも不十分不完全」「かくの如き不安的の移動が安定と静止とに帰し、観る働きと観られる相とが即ち主体と客体とが完全なる一致を遂ぐべき状態、狭義厳密の意味における直観が理想として立てられ或いはあこがれの目標として或いは享楽の内容として説かれた」（289）
「この思想に宗教的意義が加われば、観念そのものに神的実在を見るイデアリズムスの宗教、乃至それの徹底化としての神との完全なる合一乃至同一化において成立つ神秘主義が宗教の唯一の形態となるあろう」「トマス・アクィナス」「カトリック的キリスト教はキリスト教とこのギリシア的の思想及び宗教との結合を特徴とする」「「神を見る」ことも、ここではむしろ、少くも同時に、神に関する理論的認識の完成を意味した」「死後の生活にはじめて実現をみるべき超越的永遠的なる浄福の内容として希望の対象となった」「自然的認識のみならず啓示的認識もそれの不完全なる準備的なる形態として解釈され得るであろう」「合理主義の段階における認識は対象のみならず認識の仕方においても不完全であり、超自然主義の認識の仕方は不完全むしろ最も不完全でさえあるが、対象においてはすでに最高段階即ち神の本質に到達し、永遠の浄福の一歩手前まで向上の道しるべを務めるであろう。これがトマスの思想の趣旨である」（290）
「宗教的内容の深さ崇高さ」「理論的薄弱さ」「純粋の合理主義によって間に合わせの哲学の地位に落された宗教がここでは最上位に高められ哲学は却って神の直観への準備段階いわば低級な宗教の地位に甘んぜねばならなくなった」「宗教的生は現実の生活においては実は完成を見ず、その完成は希望の対象たる永遠の生活に委ねられねばならぬ故、それの性格と特徴とは現実的に与えられる所のものを標準としてのみ理論的規定を見るであろう」「認識の直接的対象は観念的存在に過ぎぬ故、宗教の対象もそれにとって最も重要なる特徴である実在性を失わねばならぬに至るであろう」「この立場において許される宗教の類型が厳密には理想主義と神秘主義とに限られることは、宗教哲学の正しき立場としての資格をはじめより奪い去るであろう」（291）
「理論的体系的には確かに強み」「しかしながら」「自然的神学従って合理主義の跋扈を助長するものではなかろうか」「人間の最高善、認識の永遠的完成はもとより人間学の範囲に属する問題」「この人間学的教説の根拠乃至前提はいずこに求むべきであろうか」「トマスの体系においては神学、この場合は自然的神学、以外には勿論求められぬのである」「この神学的教説は自然的理性の証明によって厳密に理論的論理的に根拠づけられている。換言すれば自然的神学を従って合理主義を単なる準備段階に落とそうとするこの人間学的教説は、自然的神学そのものの基礎の上に前提の下に建設されたのである」「合理主義及び超自然主義の欠陥を単に両者の直接的総合によってのみならず、更に宗教的信念にもとづく一層高き立場よりする総合によって克服しようとしたトマスの傑出した典型的努力もかくしてついに失敗におわった、又おわらぬを得なかった」（292）

一三

「宗教的対象の超越性がトマスにおいてはなはだ不徹底であるという事実」「神の不可認識性の根拠である超越性は」「平たく煎じ詰めれば、神は人間及び世界と比べて大いに優っているという尽きる」「超越性従って他者性がここでは性質的従って観念的であって実在的でないことである」「それは、観らるべき眺めらるべき事柄として主体の前に客体の面に置かれた」（293）

「Gilson は「中世哲学の精神」と題して」「トマスが神の諸属性のうち「存在」を中心に置き、しかも「存在」をギリシア哲学者の如く主として「しかある」（即ち essentia）の意味に解せず、むしろ実在性（existentia）を含めたる否特にこの実在性の意味に解したことを力説し、それをかれの所謂「キリスト教的哲学」の特徴として指摘した。これは適切な観察である」「中世哲学が宗教的特色の特に鮮やかな宗教的体験に基づいている証拠であって」（294）

「比較を離れては成立ち得ぬ」「かくの如く実在性の意味の他者性（超越性）までが観念性のうちに融け込んだところでは、神の超越性が比較的のもの相対的なもの以上にでることができぬのは当然である」「程度は程度であるに変わりない」「神は原則的に可認識的であるが、ある程度ある点においては不可認識的であるというに過ぎぬ。かくの如き立場において認識論が徹底を欠き矛盾を示すは当然期待し得ることであろう」

「トマスは、神は永遠的である、神はかれ自らの essentia である、神においては essentia と existentia は同一である、などの極めて積極的なる極めて肯定的なる言表はしまでも、神は「何でないか」の否定的言表はしの中に数えねばならぬという窮状に陥った」「神に関する比論（譬喩 analogia）の意義を有すると説いて、あるかないかのいずれを選ばねばならぬ窮屈なる制限を遁れようとした」（296）「原因結果の関係」「原因としての神と結果としての人間乃至世界との間には極度の差異が存在する」「その差異の範囲内においては両者は共通点を有し従って結果より原因へ溯って推論する認識は可能になる。かくして得られた認識は述語の全面的意義においては神に当てはまらぬが譬喩的には当てはまる。しかしこの因果的比論はさらに存在の比論（analogia entis）によって根拠づけられる。神と人間（乃至世界）とに共通なる最も基本的な述語は存在である」「一切は神に依存し各はそれ相応の存在を（神より与えられて）有するという点において神と比例的に（比論的に）類似するのである」（297）

「神と人（乃至世界）との間に存する不連続性は宗教的体験の最も基本的なる要求である。この本道を避けて連続性の方向に迂回を試みるならば目的地への到達は予め断念されねばならぬ。しかもこの脇道こそ合理主義の取る所、最も徹底的に取る所のものである」

「削除（remotio）による消極的認識も、因果関係に基づくしかも究極は存在の比論に根ざす譬喩的認識も、等しく神の本質 essentia の認識、神そのものを直接に対象とする理論的認識でなくて何であろうか」（298）

＜波多野宗教哲学方法論の発展―― 1920 年代～ 1930 年代＞

宗教＋哲学

宗教研究全体の中での宗教哲学の位置づけ

実証主義的宗教論と合理主義的宗教論

基本的構想は変わらないが、トマス理解などに深まりが見られる。

本質／類型／人間学（自然、文化、人格）
経験／理解／体系
事実・意味・象徴

１．実証主義との対決
事実、意味、象徴などの諸概念による経験構造の明確化
２．類型論から本質論への展開
３．哲学的人間学の位置づけ
生の三つの類型論から
４．議論の精密化：超自然主義と合理主義との関係理解の深化
・現代神学の思想状況
超自然主義という文脈で
・トマス研究、ジルソン
主知主義・合理主義という文脈で

＜三部作における方法論的確認事項＞

１．宗教哲学の問題状況
・近代現代：現代宗教学、実証主義の問題
科学と哲学、学問論・事実と内容（意味）
意味の形而上学
・伝統：合理主義と超自然主義の問題
認識論的問題設定の限界
↓
真理契機を有しつつも正しい宗教哲学とは言えない。
２．象徴論：宗教経験と象徴論を一つのプロセスにおいて見る。認識論から人間学へ。
３．宗教経験：超越性と他者性
４．自然、文化、宗教という図式
５．批判的実在論

＜波多野宗教哲学の構造＞

・近代哲学の文脈における宗教哲学、その変貌
宗教・哲学――経験・事実と普遍妥当性・知
実定性（生・経験）：キリスト教、多様性
知の動態（価値・意味）：体系と方法
宗教体験の自己理解（自らの経験に納得する）
伝統と近代科学
本質論（宗教　←→　神）―――自然主義・実証主義
合理主義、超自然主義

人間学　　類型論

人間学→経験の意味構造

体験自体が有する意味構造→表現、知の動態（→形而上学）

形式（文化）と内実（根拠）

象徴化

認識のプロセス：

経験―多様性・個別性

↓

類型

↓

本質

・宗教本質論：宗教とは何か

カント的な転換、合理主義・主知主義批判、人間学

・宗教批判

宗教が可能性にとどまるケース

宗教としての意識されない

柔らかな無神性、世俗主義、無関心

宗教のゆがんだ逸脱、他律性

批判

↓

なぜ、宗教か

↓

人間学、宗教の意義

・多元性：どの宗教なのか

宗教現象学（宗教学）

多様ではあるが、単なるカオスではない

↓

類型論

・キリスト教の起源